

ている。ソ連はむろんだが、レーガンのアメリカだって脅威だ、という見方が、おどろくほど広範に拡がっているのである。

中立主義は西欧の弱さのあらわれであり、ソ連の術中に陥るだけという声はむろん当の西欧にもあるが、西側同盟に亀裂が広がっていることは避けがたく、これがアメリカ人をいっそう不機嫌にしている。

西欧だけではない。中米情勢も、アメリカ人にとっては憂鬱のタネである。第二のベトナム化への怖れもあって、六割以上のアメリカ人が直接的な軍事介入に反対していることは事実だが、拱手傍観しているには、裏庭の問題でありすぎて、心穏やかではありえない。

レーガン政権が、途上世界における現状改革を目指す——当然な動きを、すべてモスコウからの指令や使囀によるものと連断、武断政策に赴きがちな点を、昨年末話し合う折のあったカーター前大統領は鋭く批判していた。まさにその通りで、レーガン政権は中米諸国に対し軍事介入をほめかすなど、ややもすると伝統的な「大きなムチ」政策に赴きがちだが、これが却って情勢を混乱させ、当の中米諸国をモスコウ側に追いやる結果となっていることも、アメリカ人にとっては、しかるべき代案が考えられぬままに、やり切れないさを増幅している。

中国や台湾についても、なにかがおかしいと、アメリカ人は感じはじめている。中ソ和解の動きが、少くとも萌芽の形として出てきたとする中嶋嶺雄氏の所説は、何人かのアメリカ人議員やマスコミ関係者ががつよい関心を示したのも、この文脈において捉えられるべきであろう。

レーガン政権の対中政策のもたつきと、台湾への未練が、中国をしてアメリカとの関係に疑問を抱かせるに至ったのではないか、という

発言や問いが、何人もの口から発せられたからである。

サダトの暗殺以来、中近東情勢が不透明度を加えてきていることもいうまでもない。イスラエルやサウジアラビアとの従来は良好だった関係にも、このところかけりが目立つようになった。むろんこれには、当該諸国の国内事情も深刻にからみあっているもので、すべてをレーガン政策の責めに帰することは妥当ではないが、そうと知りつつアメリカ人の心は、なにかすっきりしないのである。

日本悪者論の根拠

不機嫌なアメリカ、というのは、かくして単なることばの綾ではない。内憂外患がこもこも、しかも相互にからみあった形で、アメリカ人の心事をチクタクと刺しては、彼らの憂鬱さをいっそう深めているのだ。

かくして彼らは不機嫌にけむるまなこで身のまわりを見渡し、世界に目を向ける。するとそこに大きく浮かび上ってくるのが日本、なのである。動く意味において日本はいまやアメリカ国内でもっとも目立つ存在である。自動車から家電製品、時計から一部食料品に至るまでが、全米どこにいても目につく。

これらが絶対的な生活必需品でなく、なくてもやっつけていける品目であること、しかもアメリカ製品で代替可能なものが大部分であることは記憶されてよい。日本からの輸出は、彼らにとって不可欠な存在ではない。実はこのあたりにも、アメリカの対日姿勢のきびしさが潜んでいる。

が、「良くて安い」製品ということで、アメリカ人消費者も手を出し、その結果、どんな辺鄙なところにおいても、日本製品の visibility



日本悪者論の背景

國 弘 正 雄

日本批判の高まり

先日、雪にうずもれたワシントンを訪れ、何人かの連邦議員とかなり突っこんだ話し合いをする折があった。

もとより多様性をもって知られるアメリカのこととして、話を立法院に限ってさえ、巨象の、そのまたほんの一部を撫したようなもの、大きなことを言うつもりも資格もありはしない。ただそれらの議員の中に、タワー上院軍事委員長と、ザブロッキー下院外交委員長の二人が含まれていたことで、通商摩擦や軍事力の面でのアメリカの対日姿勢について、強硬派の連邦議員の代表的な意見に触れる機会をもったとはいえるだろう。この二人とは、一時間のテレビ番組は喜んで、前後二時間ほどやりあった。

彼らと交わしたかなり激越なやりとりの内容の一部を直接引用ではなくあとで紹介する。タワー氏が共和党、ザブロッキー氏が民主党

と、いわば超党派の見解をご披露することになる。

むろん超党派といっても、日本流の超党派とはちがう。一人一党ともいえるあの国の議会では、共和党と民主党それぞれに所属する議員が、党議にしばられ、打って一丸となって同様の投票行動を行なうのは、きわめて稀有なことに属する。

したがって、超党派の議案が提出されたといっても、それは共和民主両党にたまたま籍をおく複数の議員が、党派を越えてある法案を出した、というにすぎない。決議案も同じことだ。それを日本流に、あたかも自民党と社会党とが、党執行部のレベルで一致した行動をとることを決め、それぞれの所属議員が、一糸乱れず党議に従って同じ票を投じたかのごとくに解しては、大きく筋を違えることになる。

それに提出される議案の数は向うの方が比較にならないほど多く、公聴会とは出席者が自由闊達に意見を述べ合う、いわば弁論大会と研修会とをつきませたような存在である。この手のアメリカに関する基